

佐世保高専における学校閉鎖・遠隔授業期間中の 学生の心の様子と学生支援に関する報告*

大里浩文**

A Report on Students' Mental State and Student Support Activities at National College of Technology, Sasebo College for the Duration of School Closures / Remote Classes

Hirofumi OSATO

1. はじめに

2020 年(令和 2 年), 全世界は 100 年に一度の世界的な大流行(パンデミック)を経験することになった。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の蔓延である。世界規模の感染拡大により, 日本はもとより, 世界各国でビジネス, 医療, 教育などのあらゆる現場, そして, 人々の生活は多大な影響を受けることになった。我が国の学校・教育現場においても, 学校閉鎖による教育の遅れ, オンライン授業, スポーツや文化大会の中止, 景気衰退による厳しい就職活動, 保護者の収入の減少など, 厳しい現実と向き合わなければならない状況となった。

本稿では, 佐世保工業高等専門学校(以下, 佐世保高専)での学校閉鎖・遠隔授業期間中の学生の苦悩と学生相談室・保健室を中心とした学生支援に関する取り組みをまとめ, また, 今後の課題を考察することを目的としている。

2. 佐世保高専の現状

佐世保高専は本科 4 学科(機械工学科, 電気電子工学科, 電子制御工学科, 物質工学科)および専攻科合わせて 879 名の学生で 2020 年度をスタートした。また, 通常, 全学生の半数に及ぶ約 400 名が親元を離れて学寮で生活する。しかし, 2020 年度はコロナウイルス感染拡大防止のため, 学校閉鎖終了後より, 通学時間が 2 時間以内の学生は自宅から通学することとし, 入寮可能人数が大幅に制限された。10 月現在, 入寮制限も少しずつ緩和されているが, 入寮希望学生の半数ほどが自宅通学を行っている状況である。

2019 年度(令和元年度), 佐世保高専では, 3 名の学外カウンセラー(臨床心理士)が来校し, 6~8 回/月の対面カウンセリングを実施した。カウンセリング受診学生は延べ 206 名であった。また, 同年度, 学生相談室長による学生面談数は 129 件, 保健室看護師が対応した相談件数は延べ 483 件であった。2020 年度も前年度同様 3 名の学外カ

ウンセラーによるカウンセリングを計画している。

3. 学校閉鎖・遠隔授業期間中の取り組み

佐世保高専は 2020 年 4 月 2 日に入学式, 翌 3 日に始業式を執り行い, 新年度をスタートさせた。しかし, 長崎県および近県でも新型コロナウイルスの感染は拡大しつつあり, 学内における感染拡大を防止する目的で, 遠隔授業に対応するための準備を急遽行い, 4 月 13 日より学校閉鎖および遠隔授業を開始した。当初, 5 月の大型連休明けより学校再開を予定していたが, 状況が好転しなかったため, 2 度の再開延期を経て, 6 月 28 日まで学校閉鎖は継続されることになった。以下, 学校閉鎖・遠隔授業期間中の学校全体および学生相談室・保健室による学生支援の取り組みについて紹介する。

3. 1. 沖新メール通信

「沖新メール通信」は, 学校としての取り組みの一つで, 遠隔授業が始まって一週間後の 4 月 20 日より毎週月曜の朝 8 時 30 分に学校から各学生に割り当てた Gmail に配信されたものである。学校閉鎖・遠隔授業という, 学生のみならず教職員も経験したことがない状況・環境の中で, 懸命に頑張っている学生を励ますために企画されたものである。学校からの各種連絡事項や案内ばかりでなく, 校長や学生会長からの励ましやねぎらいの言葉も載せてある。学生たちは外出や友人との対面でのコミュニケーションも制限され, 学校より配信される各授業を PC やタブレット, スマートフォンを利用して長時間受講するというストレスの溜まる生活を送っていることから, 可能な限り明るい話題を提供する目的もあった。また, 「沖新メール通信」を利用して, 次に紹介する「なやみ相談」や相談室・保健室の取り組みについても学生に周知した。

3. 2. 「なやみ相談」

「なやみ相談」は学生が悩み事や困り感を一人で抱え込まずインターネット上で学校に相談できる相談窓口となるものである。「なやみ相談」の

* 原稿受付 令和 2 年 10 月 30 日

** 佐世保工業高等専門学校 基幹教育科

URL は「沖新メール通信」に毎回記載され、学生に周知が図られた。図 1 は学生が相談する際に用いる相談フォームである。

学生から寄せられた相談や悩みは学生相談室長、保健室看護師、学生課教育支援係の職員のみが確認できるようになっており、相談内容に応じて関係の教員と情報を共有し連携して対応した。

アカウントを切り替えてください *必須' (When you send this form, your email address will be recorded. If it is not your account, please [switch accounts](#) *Required). At the bottom, there is a text input field with the placeholder '悩みごとや相談ごとを記入してください。*' (Please enter your problem or consultation here. *) and a button labeled '回答を入力' (Enter answer)."/>

図 1 なやみ相談

「なやみ相談フォーム」に寄せられた相談件数は学校再開までに 20 件であった。主な相談内容は、「授業理解の不安」や「課題の量」について、「生活のストレス」，「家庭の問題」であった。学生相談室と保健室は主に「メンタル」面のケアを担当した。また、各学科長が学科の相談員を務めていることから、「授業方法」や「授業で課される課題の量」に対する苦情については学科長を通じて各学科で対応した。

3. 3. 遠隔カウンセリング

学生相談室では、遠隔授業が開始されて 10 日程たった 4 月下旬、前年度より継続的に学外カウンセラーによるカウンセリングを受診していた学生に対して、メールにて現状を尋ねた。その結果、スマホ・タブレット・PC を用いた遠隔授業や外出もままならない窮屈な生活により想像以上にストレスを受けていることが分かった。また、数名の学生からはカウンセリング開始時期の問い合わせも受けた。さらに、担任の先生方からも学生がストレスを溜め始めているとの情報が学生相談室や保健室に入ってきていた。学生のメンタルケアに対応するため、学外カウンセラーによる Google Meet を使用した遠隔カウンセリングを急遽計画、準備し、「沖新メール通信」にて学生へ周知した。遠

隔カウンセリングは 5 月 8 日からスタートし、学校が再開した 6 月 29 日までに、新規も含めて延べ 42 名の学生が受診した。遠隔カウンセリングは学生の都合に合わせるのではなく、基本的に年度当初に計画したカウンセラー来校計画に従って実施した。通信環境等によるトラブルの報告はなく、概ね予定通り進めることができた。一方、カウンセリング開始時間に遅刻する学生や無断欠席をした学生がおり、自宅にいる学生に連絡をしたところ、連絡が取れない学生もいたことから、その対策が課題となった。尚、遠隔カウンセリングは、対面コミュニケーションを苦手とする学生や病欠欠席、休学中の学生も自宅や学寮から受診することが可能なため、学校再開後も対面カウンセリングと併用して実施することにした。

3. 4. 保健室トーク（おしゃべり）

通常の学校生活において、学生は、ケガや体調不良の時はもちろん、悩みを相談できる場所として保健室を利用する。また、学生にとって、保健室は「息抜きができる場」であり「些細なことでも頼れる場」でもあるようだ。学校閉鎖・遠隔授業期間中、学生は不安とストレスに苦しんでいた。遠隔カウンセリングの計画を進める際、保健室看護師もオンラインで学生と面談ができる環境を整えることで、学校生活において学生が気軽に保健室を訪れていたように、自宅にしながら、保健室を来室しているような「つながり」や「安心感」を与えることができるのではないかと考え、「保健室トーク」を開始した。特に悩みがない場合でも気軽に申し込むことができるように、「保健室トーク」のあとに「（おしゃべり）」を付け加えた。

利用手順は図 2 の通りである。トークは Google Meet を使用し、保健室看護師 2 名と保健室サポーター（学寮女子棟寮母）が対応した。複数回に渡りトークを行った学生を含め、学校再開までに延べ 12 名が利用した。

トークを希望する学生は、事前に学生相談室長にメールで希望日時の予約連絡を行い、保健室との日程調整を経て確定した。事前予約の段階で、学生にはどのスタッフと会話をしたいのかを伝えることができる旨の説明も行った。トークは 1 対 1 での実施に限らず、普段保健室で話している感じで、保健室スタッフ 3 名で 1 人の学生とトークを行う場合もあった。

学校閉鎖期間中は双方が直接会えない状況であったため、気になっていた学生は、特に、顔を見て話すことで、双方の安心感へとつながり、保健室としても、モチベーションのアップにつながったようだ。また、対面で面談することの大切さを

再認識できたとの感想を得ている。この度の「保健室トーク（おしゃべり）」の実現は、2018年度の学生指導支援体制の再整備により保健室スタッフを増やすことができたためであり、ケアの質の向上にもつながっている。学校閉鎖期間中のみならず、長期休暇中の実施も検討している。



図2 保健室トーク（おしゃべり）利用手順

4. オンラインアンケート

学校閉鎖・遠隔授業期間中、前年度より継続的にカウンセリングを受診している学生の様子やクラス担任や授業担当者からの情報により、大半の学生が慣れない授業スタイルや制限の多い窮屈な生活にストレスを溜め込んでいることが分かった。学校として学生の心身の状況を把握し、ケアをする目的でオンラインによる「こころと体のアンケート」を実施した。アンケートはGoogleフォームを利用し、遠隔授業期間中（5月）と学校再開後（7月）にそれぞれ1回ずつ実施した。図3と図4は各アンケートの実施方法、実施時期、回答数を示している。また、図5と図6は各アンケートの質問項目を示す。

1回目オンラインアンケート（遠隔授業開始約30日後）

目的：遠隔授業期間中の学生の「こころと身体」の状態を把握する

方法：Google Meet

期間：5/16(金)～5/24(土)

回答数：866名（回答率98.7%・未回答11名
（休学学生を除く））

図3 遠隔授業期間中アンケート概要

アンケートの質問項目は、学外カウンセラーの助言を受けて選定した。また、各アンケートの実施時期が遠隔授業期間中と対面授業開始後であり、学生の置かれている状況に違いがあることから、アンケートの質問項目も状況に応じて選定した。尚、実際のアンケートでは、与えられた選択肢から回答を選ぶ形式とした。

2回目オンラインアンケート（学校再開約10日後）

目的：対面授業再開後の学生の「こころと身体」の状態を把握する

方法：Google Form

期間：7/9(木)～7/10(金)

回答数：877名（回答率100%・休学学生を除く）

図4 学校再開後アンケート概要

遠隔期間中オンラインアンケート質問項目

1. ここ一週間を振り返って、**心の不調**がありますか？
2. ここ一週間を振り返って、**体の不調**がありますか？
3. 平日の**睡眠状況**について教えてください。
4. 通常の**学校生活に戻ることに不安**がありますか？
5. **ストレスを発散する方法**がありますか？
6. **相談相手**はいますか？
7. **面談**を希望しますか？

図5 遠隔授業期間中アンケート質問項目

学校再開後オンラインアンケート質問項目

1. ここ一週間を振り返って、**心の不調**がありますか？
2. ここ一週間を振り返って、**体の不調**がありますか？
3. 平日の**睡眠状況**について教えてください。
4. 朝、**家を出る時間**は何時ですか？
5. **勉強面（課題含む）に不安**がありますか？
6. **学校生活（勉強・課題以外）に不安**がありますか？
7. **人間関係で辛い思い**をしていますか？
8. **面談**を希望しますか？

図6 学校再開後アンケート質問項目

4. 1. アンケート結果

図 7 は「心」の状態を尋ねる質問に対する回答である。「不調なし（安定している）」を選択した学生が、遠隔授業中のアンケートでは 68.5% だったのに対し、学校再開後のアンケートでは 73.8% と増えている。また、すべての項目で割合が減っていることから、学校が再開されたことにより、非日常から通常の学校生活に戻ったことが心の安定につながった可能性がある。

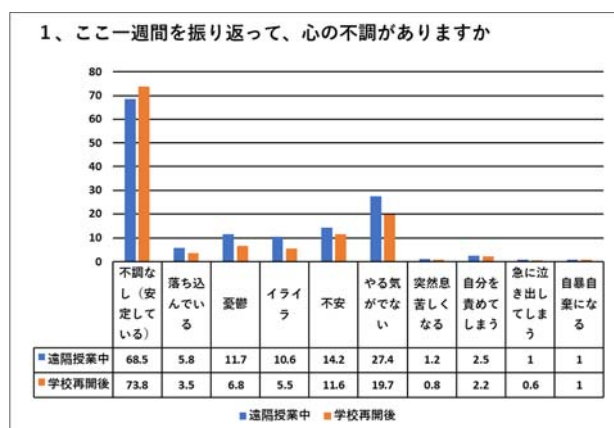


図 7 「心」の状態について

図 8 は「体」の状態に関する回答である。遠隔授業中と比較して、学校再開後は「疲れている」を選択した学生が増えており、その結果、「不調なし」の割合が減っている。これは、学校再開により、生活のリズムが変わったことが原因の一つだと思われる。一方で、他の身体症状の割合はほぼ同じか減っていた。

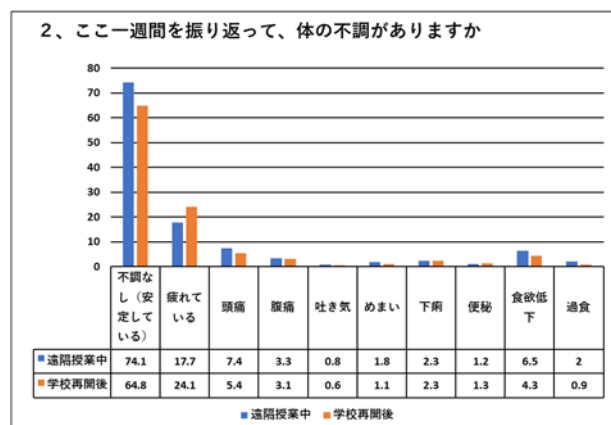


図 8 「体」の状態について

図 9 は、自宅から登校する学生の自宅を出る時間を表している。自宅通学生の多くは、バスや JR 等の公共交通機関を利用している。利用者が多い時間を避けるため、また、自宅から学校までの所要

時間を考慮して、始業時間を通常より 1 時間繰り下げた 9 時 50 分から 1 校時目が開始されるようになった。しかし、通常では学寮での生活が望ましい距離に自宅がある学生も多く、図 9 から分かるように、8 時までには自宅を出なければならない学生が 38.2% (335 名) おり、その内、約 80 名の学生が 7 時までには自宅を出ている。

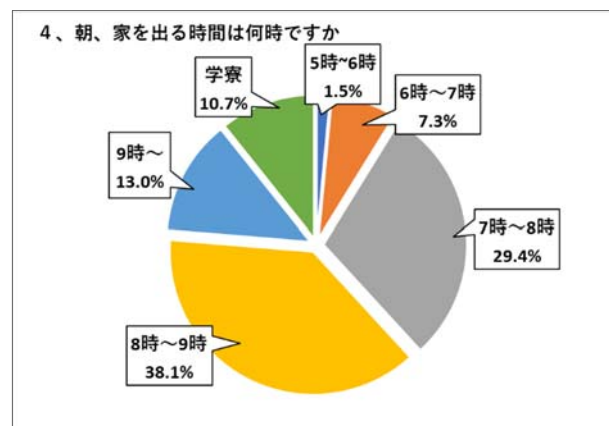


図 9 自宅を出る時間

「通常の学校生活に戻ることに不安」について、遠隔授業中のアンケート（図 10）では、55.4% の学生が「不安」を感じていた。学校再開後のアンケート（図 12）によると、6 割以上の学生が学校生活（勉強・課題以外）には不安を感じてはいないが、一方では、図 11 から分かるように、約 85% の学生が勉強面での不安を抱いていた。オンライン面談や「なやみ相談」への投稿を通じて分かった主な不安は、多くの学生が自分一人で勉強する環境により、自分の理解度が不安になり、また、性格や特性により授業の参加や課題の提出が思うようにいかなかった学生も多くいた。

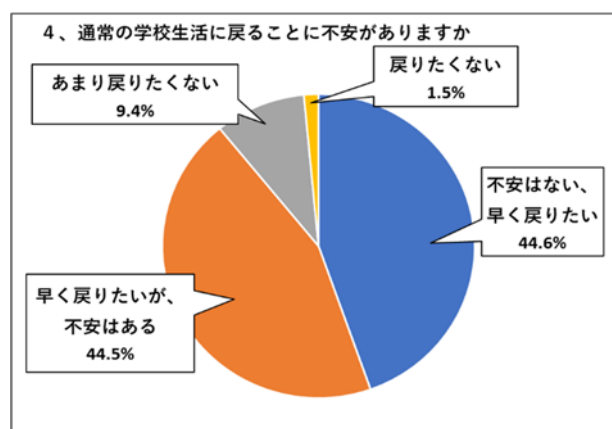


図 10 学校生活への不安（遠隔授業中）

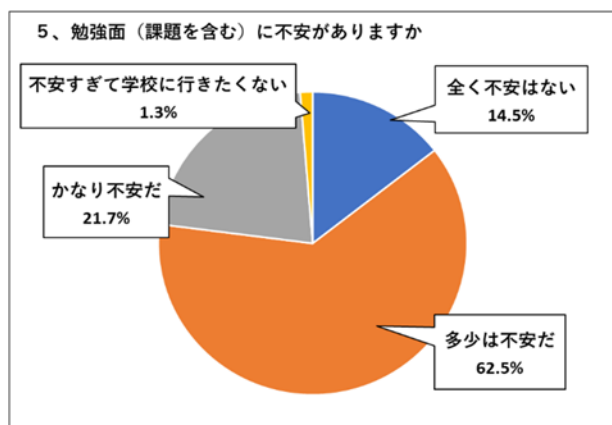


図 11 勉強面（課題含む）の不安（学校再開後）

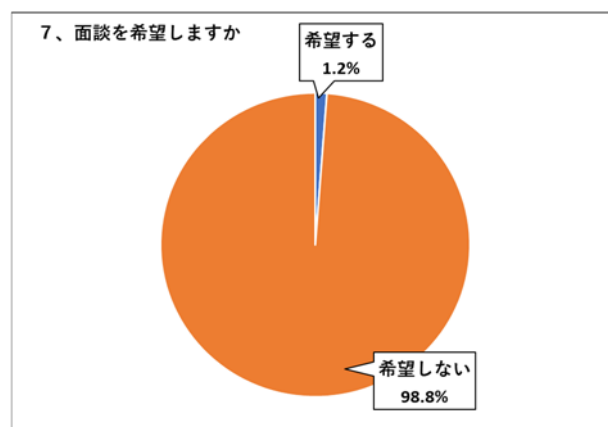


図 14 面談希望の有無（遠隔授業中）

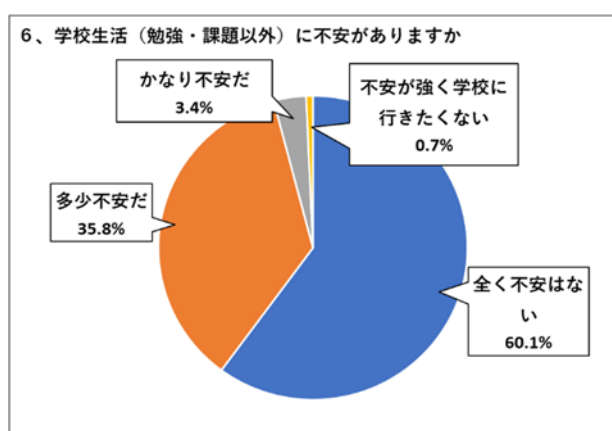


図 12 学校生活の不安（学校再開後）

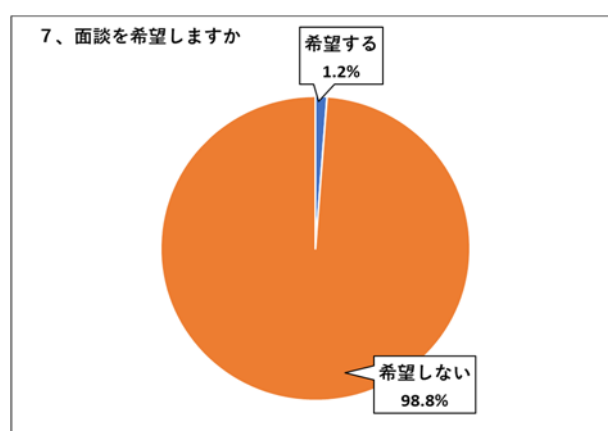


図 15 面談希望の有無（学校再開後）

最後に、遠隔中のアンケート（図 13・図 14）では、11%（86 名）もの学生が「相談相手はいない」と回答しているにもかかわらず、「面談を希望する」と答えた学生は 1.2%（10 名）程度であった。この結果は、学校再開後のアンケート（図 15）でも同様であった。

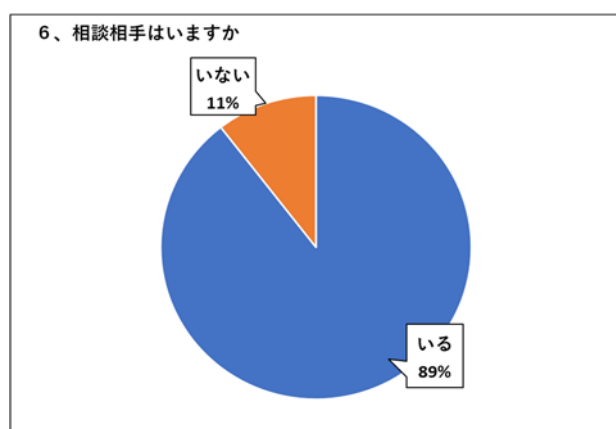


図 13 相談相手の有無（遠隔授業中）

4. 2. アンケート結果の活用

2 回のアンケート結果については、担任と共有し面談等の資料としていただいた。また、「心や体の不調」で複数選択している学生、「不眠」を選択している学生、「不安」が強い学生には学生相談室と保健室で協議し、メールで状況確認を行うとともに面談を打診した。さらに、アンケート結果をグラフ化して「沖新メール通信」に載せ、全学生に公表した。その目的は、多くの学生が共通の悩み・困り感を抱き、一人で悩んでいたため、アンケート結果を共有することで学生の不安の軽減を図るためであった。

5. 考察

「なやみ相談」やアンケート後の面談や遠隔授業を通して、学習面に対する不安を抱えている学生が多かった。自宅で遠隔授業を受ける環境から、クラスメイトの様子が分からず、学生は「自分はきちんと授業を理解できているのか」、「周りの友達は何のぐらい理解できているのか」、「自分は課題に追い詰められているが、周りの友達も同

じように課題に追われているのか」，「留年するのではないか」等に苦悩していた。その他としては、昼夜逆転，不眠，運動不足，家庭内での居場所，家族の不仲等の相談もあった。

通常の対面授業期間中と比較して，遠隔授業期間中および学校再開後に学習に対するモチベーションを落とした学生が目立った。オンラインでの授業スタイルでは学習の理解が追い付かなかったり，課された課題の把握ができず課題を溜め込んでしまったりすることで，意欲の低下につながり，心の不調につながったケースも多々あった。学習へのモチベーションや意欲の低下により，イライラ感，憂鬱，将来に対する不安，生活全般に対するエネルギーの減退，中には，自暴自棄に陥る学生もいた。クラス担任，教科担当，学生相談室や保健室がそれぞれの立場で「声かけ」をし，早期から状況確認と心のケアを行う必要があると思われる。また，学校閉鎖期間中であっても，ケース毎に個々の学生の状況に応じて，特別登校という形で早期から学校に登校することを許可し，緩やかな監視のもと学習に取り組ませたり，面談をする機会を作ったりするなど，柔軟に対応することも必要だろう。

1 年生においては，他学年とは異なる不安の要因があったと思われる。この度の学校閉鎖・遠隔授業は，入学直後からの開始であり，1 年生にとっては，学校の年間スケジュールも経験できておらず，また，クラスメイトや教職員との関係も築けていない状態であった。スマートフォンや PC を介した授業形態にも慣れていない上，クラスメイトの様子も分からず，自分だけが理解できていないのではないかと不安を募らせていった。また，高等学校や高等教育機関には，留年制度がある。留年について，入学前は漠然とは理解していたが，遠隔授業を一人で受けることによって更に留年が現実的で身近なものとしてとらえられ，不安がより一層深まったと思われる。更に，佐世保市内や近隣地域の中学校や高等学校も一時的に学校閉鎖の期間があったが，高専よりも早い時期に学校が再開されたことも不安を助長させ，高専入学という進路選択および自身の将来までも悲観する学生もいた。

学生が遠隔授業で用いるデバイスの性能上の不便さが非効率的な学習や学習意欲の低下につながったケースも考えられる。PC やタブレットを用いて授業を受講した学生もいるが，多くは自身のスマートフォンを利用していた。スマートフォンでは複数の授業資料を同時に閲覧することは難しく，授業時間内に処理することはできなかったようだ。また，小さな画面を長時間見続けることにより心身にかかるストレスは多大なものであったと思わ

れる。

一方，本校には自閉症スペクトラム症や ADHD の診断を受けている学生のほかに，SLD（限局性学習症／限局性学習障害）の傾向がある学生や発達障害の様相を示す学生もいる。そのような特性を持った学生は，自身でのスケジュール管理が難しく，クラスメイトや教員とコミュニケーションを取ることを苦手としている。また，興味関心に偏りがあることから，自由な環境では自分を律して授業に臨むことが難しい学生もいる。さらに，周りの様子が見えないことから，自身の理解度および学習の進捗状況の把握が難しく，コロナや遠隔授業の終わりが見えないことで，さらに不安を助長させた可能性もある。

学校再開後，自宅から通学している学生の中には，長時間かけて公共の交通機関を利用して登下校している学生も多くいる。登下校に長時間要することにより肉体的にも精神的にも疲弊し，この状況がいつまで続くのか分からないまま，クラブ活動も思うようにできず，趣味を楽しむ時間や家庭学習の時間が十分に確保できないストレスから学習や学校生活に対する不満や憤りを募らせているものも多々いた。

学校が再開され，遠隔授業期間中に抱えていた不安が軽減された学生もいた一方，新たな課題も現れた。遠隔期間中に溜め込んだ課題を少しずつ提出する学生ばかりでなく，特に慌てる様子もなく，自ら取り組む姿勢を見せず，一向に課題提出ができない学生もいた。また，対面授業が再開し，遠隔授業期間中の授業内容を理解できていなかった現実に直面し，落ち込む学生もいた。

以上のように，遠隔授業と学校再開という非日常的なことが，学生の心に与える影響は非常に大きかった。今後，遠隔授業に限らず，日常とは異なる状況に陥った際，全ての学生が抱える困難や不安を理解した上での指導や配慮の重要性が再認識できた。

6. まとめ

新型コロナウイルス感染拡大防止のため，本校は創立後初めて約 3 か月に及ぶ学校閉鎖と遠隔授業を経験した。遠隔授業期間中に行った学生支援の取り組みを通して，通常の対面授業では気づかなかった学生の不安や苦悩に気づき，また，今後の支援に対する課題も多く見つかった。

まず，教員側の反省として，学生が用いるメディアに適した授業展開や適切な量の課題を課することが必ずしもできなかったことが学生の学習面に対する不安や学習意欲の低下につながった可能性は否定できない。教員にとっても慣れない環境での授業ではあったが，学生の学習環境を整備する

ばかりでなく、学生が不自由な環境の中でも最大限の理解を深められるような授業展開を工夫する必要がある。

遠隔授業期間中は、対面授業と比較して、担任や授業担当者は直接学生を観察することはできない。よって、通常以上に様々なアプローチを用い、学生との密なコミュニケーションを行い、教員間の情報を共有し、学校全体で連携した対応が重要になってくる。

さらに、発達上の特性や性格から、遠隔授業に適応するのが困難な学生には、早期から特別登校を認め、教員による緩やかな監視の下で授業や課題に取り組ませることも必要である。

教員にとっても遠隔授業は初めての経験であった。遠隔授業という非日常の環境がどのような影響を学生に及ぼすのか想像もできない不安の中、クラス担任や授業担当教員は様々な工夫を凝らし、学生の状況把握や学習に対するモチベーションの維持に努めた。課題提出が滞っていたり、遠隔授業への出席状況が悪かったりするなど、学生の異変が見られた際には、相談室や保健室と情報を共有し、連携して対応することで、より早期に学生にとって効果的なサポートを行うことができた。情報共有し、連携して関わることで、教員の不安や思いを聞くことにもつながった。教員にとっても非日常であり、教員の思いを表出する場所を作ることも、大切な役割の一つだと認識した。

この度の学校閉鎖や遠隔授業といった非日常の生活は学生に対して想像以上の不安やストレスを与えた。遠隔授業は決して望ましい学習環境ではないが、日常の対面授業よりも早期に学生の困り感や発達上の特性に気づくことができたケースも多々あったことは前向きに捉えるべき一面であろう。ただ、アンケート結果からもわかるように、自ら相談を希望する学生はほとんどおらず、教員側からの声掛けがとても重要となる。遠隔授業は学生と教員との間に距離があるからこそ、教員が連携し、情報を共有することで、多角的に学生の様子を観察し、状況を把握することが必要である。また、対面授業・遠隔授業にかかわらず、日ごろから学生の様子を観察し、学生の思いに寄り添う教育を意識して取り組まなければならない。